

## 「自殺関連サイト」について

令和2年9月30日、東京地方裁判所立川支部にて座間連続殺人事件の裁判員裁判が始まった。この事件は座間市内のアパートの室内から女性8人、男性1人の合計9体の遺体が発見されたことを契機として、被告人・白石隆浩（以下、「被告人」という）が強盗・強制性交等罪、強盗殺人罪、死体損壊罪、遺棄罪で起訴された事件である。被告人は自らの性欲を満たすために「死にたい」「安樂死」「自殺」などとツイッターなどを通じてつぶやいた女性らを誘い出して殺害し続けた。自暴自棄になつたり、孤独感に苛まれたり、自己肯定感を持てない人々が加害者との接点を持つてしまった時に犯罪は起ころのである。私は、ツイッターナなどを通じて被告人に近づいてしまった。

い、被告人に殺害された被害者たちの立ち位置とはどのようなものなのか、自殺サイトにアクセスしてしまう人々の置かれた環境とはどのようなものなのかということを考えてみた。井哲也氏の著書「ルポ 平成ネット犯罪」（ちくま新書）を手に取った。

SNSは多くの人々の孤独な心

が発見されたことを契機として、被告人・白石隆浩（以下、「被告人」という）が強盗・強制性交等罪、強盗殺人罪、死体損壊罪、遺棄罪で起訴された事件である。被告人は自らの性欲を満たすために「死にたい」「安樂死」「自殺」などとツイッターなどを通じてつぶやいた女性らを誘い出して殺害し続けた。自暴自棄になつたり、孤独感に苛まれたり、自己肯定感を持てない人々が加害者との接点を持つてしまつた時に犯罪は起ころのである。私は、ツイッターナなどを通じて被告人に近づいてしまった。

が見えたことを契機として、被告人・白石隆浩（以下、「被告人」という）が強盗・強制性交等罪、強盗殺人罪、死体損壊罪、遺棄罪で起訴された事件である。被告人は自らの性欲を満たすために「死にたい」「安樂死」「自殺」などとツイッターなどを通じてつぶやいた女性らを誘い出して殺害し続けた。自暴自棄になつたり、孤独感に苛まれたり、自己肯定感を持てない人々が加害者との接点を持つてしまつた時に犯罪は起ころのである。私は、ツイッターナなどを通じて被告人に近づいてしまった。

従前から電子掲示板やメール、チャットを通じて自らの生きづらさを吐露することで、電子掲示板などが情報交換の場になってきたし、自殺サイトもその延長線上にある。そして、これらネットによる自殺助長の傾向が生じていることは否定できません。自殺関連サイトを規制する動きも当然出てくる。ところが、安心

されない。逆に、自殺を念慮する人々がネットに自らの気持ちを吐露し、それに返信があつて自殺を思いとどまることがあつたとしても、その反

応では、動画配信サービス（ユーストーリー）にて自らの自殺動画を配信する多くの自殺者が現れている。平成24年5月14日、北海道在住の男性（18歳）が撮影した自殺動画では、首吊りの準備をする様子や、自宅から自殺場所へ移動する状況、自殺現場に着いた後は、「まあ、明日になればわかるさ。これでも俺のことを世は無視するか。実験できる」などとすすり泣く声も聞こえる動画もあった。

実際に、見ず知らずの人々がネットでつながり、自らの自殺願望を語り合い、自殺間際に初めて顔を合わせて一緒に自殺してしまう事件や、練炭や車両を準備できる者で自殺を希望する者たちをネットで募つて計画的に情報交換をした上で自殺してしまう事件が後を絶たないという現実があり、そのことから強く規制すべきとの価値判断も出てくる。しかし、強く規制してしまつた場合でも、その効果として練炭自殺などの集団自殺などが減少するとは思われない。逆に、自殺を念慮する人々がネットに自らの気持ちを吐露し、それに返信があつて自殺を思いとどまることがあつたとしても、その反

応を映し出す鏡、受け皿になつていい

連行動とネット上の情報との関連についての研究】における平成23年の研究結果では、匿名のユーザーが

からは「心中掲示板」「自殺系サイト」と呼ばれるサイトも増え続け、自らの自殺願望を吐露し、さらに自傷行為の写真をアップしたり、最近

では、動画配信サービス（ユーストーリー）にて自らの自殺動画を配信する多くの自殺者が現れている。平成24年5月14日、北海道在住の男性（18歳）が撮影した自殺動画では、首

吊りの準備をする様子や、自宅から自殺場所へ移動する状況、自殺現場に着いた後は、「まあ、明日になればわかるさ。これでも俺のことを世は無視するか。実験できる」などとすすり泣く声も聞こえる動画もあった。

面、「早く死ねよ」「はよう」「もう面倒臭いから、はよ死ね」などと書き込み、結果として自殺へと追い詰められてしまう事例もあることからネット規制の是非の問題はどう根が深い。

小さなところからの学校内でのいじめ、児童虐待、貧困や、就職した後の孤立感、疎外感などを日常生活において吐露することが難しい数多

くの人々が現実にいる。そして、かかる人々の気持ちを吐露し、同様の環境に置かれている人々との情報交換をすることを通じて前のめりになつても重たい一步を歩み出せる人々がいることも確かである。最近では「自殺」と検索すると自殺防止センターのアカウントが表示されたり、さらには、自殺サイトでの「コミュニティションを通じて自助的な「コミュニティ」ができたり、お互いに自殺念慮をケアするなどの動きも出てきていると言われている。

そういう「コミュニティ」から発信できる情報も自殺を思い悩む人々への援助になればと思ってならないが、それほど根が深い現実に私は打ちのめされてしまった。